

特

集

緊急に求められた病害虫防除対策の事例を考える

モモせん孔細菌病の総合的な防除の 取り組み

福島県農業総合センター果樹研究所 なな七 うみ海 たか隆 ゆき之

はじめに

モモせん孔細菌病は *Xanthomonas arboricola* pv. *pruni* を主病原とする雨媒伝染性の難防除病害であり、近年では全国的に発生が多く、モモの安定生産の大きな阻害要因となっている。本病は枝、新梢葉および果実に発生し(図-1a~c)、枝の枯死や早期落葉等を引き起こすが、果実に発生した場合には商品価値の著しい低下を招くため特に問題となる。

本病には卓効を示す薬剤や耐病性品種がないため、化学的防除と耕種的防除を組み合わせた総合的な防除対策(図-2)が必須であり、その重要性について本誌第74巻第5号で解説した。本稿では福島県における本病の総合的な防除対策の取り組みの現状と課題について紹介する。

I 福島県でのモモせん孔細菌病の発生経過

福島県内で本格的にモモの栽培が始まったのは1950年代半ばであり、1960年代半ばに主産地である県北部の福島盆地の山間部に新たに造成された圃場において初めて本病の発生が確認されるようになったが、その発生は山間部の圃場に限定されていた。しかし、1980年代

半ばにはこれまで発生が見られなかった平坦部の圃場でも発生が認められるようになり、前年8月下旬に台風による記録的な豪雨があった1999年からは産地全体で本病が多発傾向にある(落合, 2003; 図-3)。特に直近10年間(2011年から20年)では、病害虫防除所から延べ17回の注意報が発表され、数年おきに甚大な果実被害が発生するなど危機的な状況が続いている。

また、福島県の農作物病害虫防除指針では1970年以降、本病が発生しないことを前提とした防除体系と本病の発生に対応した防除体系を併記してきたが、2004年からは本病の発生を前提とした防除体系のみの記載となったことも、本病の発生拡大を示している。

II 多発要因の解析

本病と気象要因の関係については古くから研究が行われ、特定の時期の降水量や風速、気温との関係が強いとされてきたが(落合・林, 1989; 森本, 2011)、近年の岡山県での研究では、収穫期における本病の発生には当年の気象要因よりも越冬菌密度の影響が大きいことが報告されている(KAWAGUCHI, 2014)。福島県でも同様の解析を実施したところ、主力品種‘あかつき’の収穫期の果



図-1a モモせん孔細菌病の罹病枝
(春型枝病斑)



図-1b モモせん孔細菌病の罹病葉



図-1c モモせん孔細菌病の罹病果実

Integrated Control of Bacterial Spot on Peach. By Takayuki NANAUMI

(キーワード: モモ, せん孔細菌病, 防除対策)